

週刊センターニュース No.60



第 60 号 (2005 年 5 月 16 日) 毎週月曜日発行
発行：金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

共同学習会のご案内

第 74 回 日時：5 月 19 日 (木) 16:20 ~ 17:50

会場：角間キャンパス総合教育棟南棟 2 階大会議室

報告者：西山 宣昭 (大学教育開発・支援センター助教授)

題目：「石川シテカレッジにおける最近の取組について」

以下の第 75 回は、金沢大学 IT 教育推進プログラムの一環として、当センター共同学習会と本学イーラーニング研究会との第 10 回合同研究会として開催します。

第 75 回 日時：5 月 23 日 (月) 16:20 ~ 17:50

会場：総合メディア基盤センタープレゼンテーション室

報告者：小松川 浩 (千歳科学技術大学助教授)

題目：「理工系の e-learning を介した全学的な教育プロジェクトの実践

- リメディアルから専門教育へ向けた展開 - 」

概要：千歳科学技術大学では、理工系分野でのリメディアル教育とキャリアアップ教育に対して、積極的に e-learning を適用している。リメディアル教育については、高大連携の枠組みを利用して、高校・大学双方の教員の協力に基づく e-learning 教材の開発を行い、双方の授業で実際に活用している。特に、最近では高校側が中学と、大学の初年次教育が専門教育と連携することで、幅広い理工系の知識の共有を e-learning を通じて行う取り組みを実践している。また、情報系の教員と各科目担当教員が連携し、コンテンツ及びシステム開発に積極的に学生を参加させることで、一連の取り組みを情報キャリアアップ教育に繋げる試みを行っている。日頃 e-learning を利用する側の学生が、実際に開発体験を行える教育プログラムを通じて、専門教育に対する効果的な動機付けを図る狙いとなっている。

以下の第 76 回は、留学生センターとの共催で開催します。通常の間とは異なりますので、ご注意ください。

第 76 回 日時：5 月 26 日 (木) 14:40 ~ 16:10

会場：角間キャンパス総合教育棟南棟 2 階大会議室

報告者：栗山 尚一 (外務省顧問 元駐米大使)

題目：「21 世紀の国際理解」

京都大学高等教育研究開発推進センター第 68 回公開研究会に参加して

2005 年 4 月 16 日 (土) に京都大学吉田キャンパスで開催された、京都大学高等教育研究開発推進センター第 68 回公開研究会「京都大学・UCLA を結んだ遠隔講義による創造性教育：平成 16 年度の実践から (<http://www.media.kyoto-u.ac.jp/distlearn/japanese/clc2004spring/index.html>)」に参加した。

報告者は、京都大学学術情報メディアセンターの喜多教授であった。京都大学では以前から TIDE プロジェクト(<http://www.media.kyoto-u.ac.jp/distlearn/japanese/>)で UCLA と遠隔授業を進めてきていたが、平成 16 年度は、Squeak と呼ばれるオブジェクト指向プログラミング環境と、その上に構築された Squeak-Toys というツールを用いて、総合的な学習の時間に適したカリキュラム開発や子供同士での協調作業環境構築に取り組んでいる、ALAN-K(Advanced Learning Network in Kyoto)プロジェクトと連携し、京都大学(全学共通科目「創造・学習・コンピュータ」)と UCLA(Computer Science の授業 "How Children Will Finally Invent Personal Computing")との間で専用線の高速ネットワークを利用した遠隔授業を実施した。

授業は、4月9日～7月14日の毎週水・金曜日(8:30-10:00、UCLA 側では 16:30-18:00)に開講された。UCLA の授業期間の関係で遠隔授業は6月11日で終了し、その後は、京都大学単独での開講となった。京都大学側での参加者は、28名(内12名が外国人学生)であった。授業は、Alan Kay、Seymour Papert といったコンピュータサイエンスの大御所たちによる講演と教材開発プロジェクトからなっている。教材開発プロジェクトでは、大学生が、「小学生が、Squeak-Toys を用いて、創造性を発揮し、数学的・科学的概念の習得につながるプログラミングが出来るような教材」を開発することを目指し、構想、設計、実装、実践まで一貫して行った(授業期間の関係で、UCLA では設計まで)。具体的には、学生は5人程度のグループに分かれ、基本設計(フェーズ1) 実現方法設計(フェーズ2) 実装(フェーズ3)を行い、各フェーズの結果として、グループ毎に10分程度の発表を行い、講師や受講生間で意見交換を行った。京都大学側では、フェーズ3として、京都市教育委員会の協力を受け、市内の2つの小学校で実際に小学生対象のワークショップを開催した。「レモン電池でカーレース、摩擦、花火、座標学習」などの開発教材について実践し、小学生の満足度は高かったとのことである。また、授業の中では、京都大学学生による UCLA 訪問(旅費一部援助) 授業のビデオ画像のアーカイブ(英語確認用)なども行われていた。授業運営のサポート体制としては、「専任のスイッチャーがついていて、すぐに希望の映像を出してくれる。機器類はプロのスタッフがいているので、問題があってもすぐに解決。」といった非常に恵まれたものであることも付け加えておく。

遠隔授業としては、映像、音声品質は問題はなかったが、コースの運営方法(単位認定、双方のコミュニケーション(英語授業) 英語の術語の問題など)には課題が残ったとの報告がなされた。また、グループ学習・活動については、「グループ学習は、学生にとっては新鮮で興味も湧いたが、日本側学生のグループ運営能力は高くない(学生間での統一性が失われている、授業時間外活動の時間を見つけるのが難しいなど) 交換留学生参加による異文化間コミュニケーション促進、小学校での実習は良い動機付けになった」といったコメントがなされた。期末レポートは、テーマを限定せず、「この授業を経験して誰に何を伝えるのが価値のあることか」を見定めてレポートを書くことを要求した。全体としてレポートのレベルは高かったとのことであった。

最後に、喜多教授は、平成 16 年度の実践を通して、遠隔授業が実験段階から実利用段階へ入る場合の問題点として、「大学としての目標の策定、支援のシステム化、コストダウン(高い専用線利用料)さらなる研究課題の提案」などを指摘された。このうち、最初の2点「大学としての目標の策定、支援のシステム化」については、金沢大学でも、今年度後期から始まる、北陸地区6大学双方向遠隔授業にも当てはまる問題であり、今後、学内でさらなる検討が必要であろう。

(文責 教育支援システム研究部門 堀井)